



異國
再見

和莊兵衛

後編

利三

2.014
7
13





了
舟
の
舟
の
舟

異國 和莊兵衛後編卷之三
再見

大擔園



又かの大擔玉まで一子里がふらふ高く谷津ふ
ましくくが路ありく飛トも汗ありあじ潮く夜ふ
目小はしどくすの余りけり大擔玉れ境に金六
つれ家活ありまよりまゝの内には松栢生茂り
寂ふどれ苦むして小春の巻を巻るをとあらしそい
秋は牡丹花のけりて狐欺と控弁戸わざり弁戸伽
藍つ所のん事ささ芭蕉花にハ詩文かと書拵祇小



ロニニ一

手紙せぬ庭のむね指いとあつくゆりく屯トても
 かみ素肉とくば志とくめうとに居士夜と蒸一
 たり六十余り此人立出とくそもいつく此人必ぞ
 と同和莊を求がいりく抹者ハ英國執事此者必
 ぐ長の接洽小志との介はくもや中回やとくし
 中庭とらばそまの心あさ事ハ以休息とあべ
 と熱にりてあし精をへ付いて一乃方り所入して
 つまら抹去のめんこんの身分はとく英國を過く
 にかありまといの文學法藝にこり精實にとく別と

紙打とかん苗をさうけ欠落をして来る人をかくま
 ひア本を御案とふ志とく苦にとの事ハ是れは
 本もろ事終く一積分ももあべ一心をあく掃取
 せうもよと何があに敷とに其國これわうさう人紙
 呼おし法益紙致とせりさんとやうと拍子本と
 うと終もいさうとさうくとさゆりつ黒羽二をれと
 入羽織かあんどれとらとらとげとるさおにむぢり
 かんのおう志とまうらうし志とと帯束ハかこむに
 信羽織の本締とてくに縋子れ帯皆とれつと

此を出立出のくにけり此を藝秘今之味縁やうらや
 一淨瑠璃香乃低舞茶湯沏借座後鞠あら
 い名美の志お玉おあげごい室四働まうと定ま
 くらわまのやうああこの詩文ぞ去るを
 後患人指高明遍神悪おと強九齡が速懐れ
 待文を視いおまことよりいごめさて時
 茶おれ用急ぶよあろうと皆名くぬさか
 代物お教しりりこれ町の坪屋はと
 あらと中りい使の時美好き毎苗を清り

やと立出り依るまごぐ氣紙付く切んさ
 ぐあまの猪子れ秘さおと折らうたら
 さとぐの赤ていやうれう芳和莊を
 て叔も世家いらくとておうく一孔の
 おはま出にり

金銀寶玉園

龜トぐいそく果より海とほく波清ら
 見つてりるととまへはまま
 先んてこわしや心越下



0110



和之三三

けりてけき遊風小何せつ一二百里も来ると云
 比龜トイフ所むふふス一國あり是別白達國を
 けりて大なる國也凡漢北地城去るる百八十里
 ありて漢北地城より漢北地城に毎ト珊瑚琥
 珀山海北地城の所に及ばずして金銀沢の國
 ありて小名は多て倍小令銀室玉國と云と云
 てもや磯多と云まうた是はよく掃蕩の地すん
 是より十町入りぬ大なる城大門ありて是は
 入はありて入り小名ありて是はよく掃蕩の地すん

さん其西日本入國航路の事と云す
 切ふりてありてさんる一ありにさうつさくさく
 西ゆりて長足國北極ふまはて長北極路を
 うさうさくさく一見ありて一と云はれしを我註
 比龜トイフ所むふふス一國あり是別白達國を
 けりて大なる國也凡漢北地城去るる百八十里
 ありて漢北地城より漢北地城に毎ト珊瑚琥
 珀山海北地城の所に及ばずして金銀沢の國
 ありて小名は多て倍小令銀室玉國と云と云
 てもや磯多と云まうた是はよく掃蕩の地すん
 是より十町入りぬ大なる城大門ありて是は
 入はありて入り小名ありて是はよく掃蕩の地すん

以人金銀此銀を帯一唐土日本此風着さる
 ませちくら言葉はよく且その何由れよぞけ
 への用あつとてあつとて和莊まき壘ト此
 一極ふとて言ふまぶとまぶの移るなり
 高勢此大王けるは不保あり大日本此
 國巡り此味しといつて此懸りくまよか
 是西目るくPとせんとも然てあやど
 一つ此橋門あり皆くら梯の門極小天井
 ぐ雲海の雲を流りあいたり此其あらぐ

銀此猫と入るかざり人金おまぶく
 橋下げとくのけ橋の伽羅や沉香此
 此方以の香樂穿一極や天人此
 回盤大此秋の末此葉照りそ夕日
 くく結講いん方もたぐ物日足はと
 其原Pと西目るくやと次盤一と
 乃や皆みそく吳番口方に薰ト
 此此方ほそく此此を物水と扇小
 船此若来に冠後此杖をちりぐく

盡口りこと交けは男男女女は英にて日本は業平
 唐土は揚貴妃は母来りといふ事乃張地不付て
 礼儀と申ふ大玉をやくく其方の大日本は産
 ところ英國挑引のめあう先達る子つら
 我由妻ふふまおのまなく面白くぬ星をねおく
 ついに珍しくそのめく然しそ約来りしりつは
 こそ穿切くまうと由ふ来ぬふあうて戯城を
 娘女多し我を侍ひ目なれ今ねをすふあど
 を波女ふおしとく一系流る新町あどれ

古風あり雨の面白かりまど世はあうあり祇堂那
 崎れ肉涼川をとりふをてかり雨れ志無とく
 抱くともやそくと信小和莊を来あまの真の
 名台之く廓通しも美と肉しに英國巡り
 もまうの供まの何板直ふに依りさんとまうり内
 車はく内依あお莊を来引つまうかれ漢土燕
 文山は板あやと急ぐまう板廓はに大王は板
 とく空方れ出は板かあ依のあいああ熱あり
 抑れ本ハ廓の亭ま箱批灯伴者ぐそろく

此希ごまの皆取の程く細撒ハるるう此一枝枝
 てあるうけ簪こ立一致名も此揚屋改冊抄珠
 や猫掻ちの平、此茶あさりまの庄茶此多く敷子
 此燭香もや玉れこの宗多晶のこらん令銀此池
 子鴉風雅画一の四着花車が拾得小多さん方
 逢へくお志やといつりもあう世次子連此以茶逢
 らや川くけつ三味此糸三の李伯が長根歌世揚の
 此是川小大玉もまの酒のあうが茶と此夜此
 儀うむむくろろご此此持屋笑顔和莊まもあ

てこそと吳國とり此こま色にきよ子置條が拍美似
 の翁とおめこの三味線なててういと合せこの二
 より之下り大王の太さに真小糸一多ふ所と程も
 真とさぬささぐと柳くはくおとそ及をまじ此枕打
 も秘術とそして王軍既持破も出まの教も源糸小
 及べたやく四内館と養とまがさうがと此車に
 うはくせう教もぶ和莊まも此依一法殿と此
 てゆりりり大王法持屋うりりく此夜不をく
 志のせうと扱く面白こと此の真然信ふせり扱

ロニル



和歌集

方の荒所は仕立此らよのあら申せん
 初級傳録いふ所
 為其らに決すにきまべしと信小和莊を束
 長りこ
 あり難とて歳令君ふ仕るん事古
 古の日本に異く
 まる此面目あまのあまごとと我古
 の日本と出り
 ありらと紙かあふと我英國ちぐり
 今二三ヶ國跡一
 二重一重す足跡念此一つちり
 何と我を存く二三ヶ國
 どの仕意りたし一重財のま
 ころや此目るくPとん
 其そのれん控あふれ百かへ
 一先そまことこの核
 極よく渡りせらまことほとく
 に始むしんまごて

大王まごおしませめい
 鏡あれおく終りまご和莊
 とも何があしと此重去産に
 仕りしと目ち平流
 此解あつそりし月の
 漸れ多とまひかあて
 清前
 城まば友士友女のそま
 ごとくはたつまごのそま
 ごとく
 らり和莊を束のそまごとり
 も飛下れまらいつ教
 候意すあり飛下にを
 扱く移りしと國へま
 大王に目えしゆりしに
 大さなまに入ては國ふ
 ごと
 ままことあまごとも
 夫國どりれ我を今
 ちわしに
 海で終りまごをみり
 してゆりげふ多れ
 鏡あれ

新りて垂ても切らまは次捨るもおしく捨て奉り
しぐ先生此法うまふふとふ又この若者方うけらる
其そへまをべこつらまふ切り此土産にみかうとい
の龜トの太さに迷然たりても捨るも切くて和莊三
ふ切てせぬそらくと有りうまやさんといふり
和莊三の切くはううのそんまも切く是まを以て法
方其玉出りのいふたまどか海の中く人倫は遠
はざり國か一殊ふまは捨れ此贅と云まやう
もナラや是より又このまあるましく捨るは産か
と云

龜トのいよりたうかどこの子世家此其介にもはれ二
百六の百やのあまどごうてかうりまより本もあ
皆下玉はくとまより志や心事の無用ありまうこ
ははれ振ぬおりのろまを人れ樂しと何らう切ら
あはあ一あまよりりの古やまきくは海と語く國
く大む子確を産てまををよりは女お雨古然をお
一戸産をこる此國の由りの此之用と尸せばあ
どまれる中うて捨るころ玉為もあれ事な
らばかりくはこはましくははれ下ら

登しとつていざさるる其内ろ多ありはありと
あしとておしたゆく九五百里やどもありと
とつて此處ありていざさるる盤靴とて
てかよりたつ玉あり昔け玉此人の婚に大に
りりるを玉此夷國とお我小大王敬の首紙
切て来りしめい我婚紙つてんころりれと
まをり時ふ大人呉物軍此首紙切てころり
たまふ編を汗此とく一端の契約あまはと
大正此娘を其夫にぞやり給ひりりる情あくと

畜生とまぬ此むつび紙あり其子孫末ふらび
つと女の人男の大此かうだあまといありま
はましと海とよやどれる時ほあしとてい
うりとあしとてさう海とてとて
出りたり

萬知縣一民
田中

和莊三後編卷之三終



田中

